

ベトナム語類別詞使用と名詞句の定性 —自然談話に基づく研究—

王 丹

【要旨】本稿は、ベトナム語の自然談話を対象として、「類別詞＋名詞」と裸名詞の出現状況を分析し、類別詞の使用と定性との関係、さらにその使用に影響する要因を検討する。分析の結果、(a) 指示的定の文脈では「類別詞＋名詞」よりも裸名詞が多く用いられること、(b) 丁寧な場面では「類別詞＋名詞＋指示詞」が好まれ、カジュアルな場面では裸名詞が好まれることが分かった。本稿では、これらの結果を文体、ポライトネス、情報量の三つの側面から説明を行った。従来、定の名詞句に類別詞が現れやすいとされてきたが、実際には定性よりも、情報の新旧、アクセス容易さといった談話的要因が決定的である。一般に、新情報が導入される時は明確な形式が好まれるため、類別詞が現れやすく、既知情報に対しては簡潔な形式が好まれるため、裸名詞やゼロ照応、代名詞が用いられやすいと考えられる。

【キーワード】ベトナム語、類別詞、定性、情報、ポライトネス

1 はじめに

類別詞とは、形状・構成・配置・機能/用途といった観点から、言語内の名詞の多くを分類する役割を担う、自由形または拘束形の形式群である (Dixon2012: 467)。Aikhenvald (2000: 207) によると、ベトナム語の類別詞は numeral classifier (数詞＋類別詞＋名詞)、noun classifier (類別詞＋名詞)、deictic classifier (類別詞＋名詞＋指示詞) という 3 つの種類に分けられる。ベトナム語には定性を表示する義務的な標識が存在せず、代わりに、名詞句の定性解釈は類別詞によって与えられることとなる。(1) (2) 及び (3) (4) はそれぞれ類別詞を伴う名詞および裸名詞 (類別詞を伴わない名詞) の定性に関する従来の特徴付けを示したものである。

- (1) 「類別詞＋名詞」 [+definite] (Aikhenvald 2000: 326; Lobel 2000: 310)
- (2) 「類別詞＋名詞」 [±definite] (Nguyen Tuong Hung 2004: 42; Bisang & Quang 2020)
- (3) 裸名詞 [±definite] (Nguyen Tuong Hung 2004: 42)

(4) 裸名詞 [-definite] (Nguyễn Tài Căn 1975; Trinh Tue 2011: 640)

(1) (2) から分かるように、類別詞が不定の文脈で現れるかどうか、また、(3) (4) から分かるように、裸名詞が定の文脈で現れるかどうかに関して意見が分かれている。

先行研究によると、「類別詞+名詞」は定の文脈でも不定の文脈でも現れるが、裸名詞よりも定の文脈に使用される傾向が強い (Bisang & Quang 2020: 43)。また、「類別詞+名詞」は定指示の既定形として機能し、より広範な文脈で自然に認められるが、裸名詞の出現はそれより強い制約を受ける傾向があり、不適切と判断されることが多い。つまり、定の文脈に出現する裸名詞は特別な説明を要する可能性があるという (Simpson et al. 2011: 190)。しかし、ベトナム語の母語話者によると、日常会話では、裸名詞は常に用いられ、特に、よりカジュアルな場面になるほど、類別詞が使用されない方がより自然になるという現象が確かにあるようである。そのため、日常会話における類別詞の使用実態は先行研究に反映されていないという問題点が残る可能性がある。

本稿の目的は以下 2 点である。a. 自然談話を用い、「類別詞+名詞」と裸名詞の定性文脈における出現状況を検討し、類別詞の使用と定性との関係を明らかにするとともに、その使用に影響を及ぼす要因の解明を試みる。b. 話し手と聞き手の関係に応じて、使用される名詞句の形式が影響を受けるかどうかを検証する。本稿の構成は次の通りである。2 節では、先行研究を紹介し、問題点を指摘する。3 節では、調査及び結果を提示する。4 節では、考察を述べ、本稿の主張を提示する。そして、5 節では結論と今後の課題について述べる。

2 先行研究

2.1 「類別詞+名詞」および裸名詞の定性解釈

「類別詞+名詞」に対して、Nguyễn Tài Căn (1975)、Cao Xuan Hao (1988: 39)、Aikhenvald (2000: 117)、Löbel (2000: 310) などはベトナム語において類別詞を伴う名詞句は定の名詞句であると主張している。

- (5) **Cái** **dao**
 類別詞 刃
 「刃」 'the knife' (定)

(Cao Xuan Hao 1988: 39)

- (6) **Con quạ**
 類別詞 カラス
 「カラス」‘the raven’ (定)

(Löbel 2000: 310)

しかし、Nguyen Tuong Hung (2004)、Bisang & Quang (2020) などは類別詞を伴う名詞句は定の名詞句のみならず、不定の名詞句としても解釈されると主張している。

- (7) **Tôi muốn mua cuốn sách.**
 私 ~したい 買う 類別詞 本
 「私は本を買いたい。」 (定/不定)

(Nguyen Tuong Hung 2004: 17)

- (8) **Con bò đang ăn lúa kia!**
 類別詞 牛 ている 食べる 稲 あそこ
 「牛があそこで稲を食べている！」 (定/不定)

(Nguyen Tuong Hung 2004: 43)

Nguyen Tuong Hung (2004) によると、例 (8) の「牛」に対して、二通りの解釈が可能である。発話の際に話し手が指している「一頭の牛」(指示対象)を聞き手も認識することができる場合、「牛」は定だと考えられる。一方、話し手が指している「牛」が聞き手にとって認識できなければ、この場合、「牛」は不定だと考えられる。例 (7) の「本」も例 (8) の「牛」と同様に、定と不定の二通りの解釈ができる。しかし、Tran Jennie (2011: 37) では例 (7) は日常会話において、自然に聞こえず、一般的ではないと述べられている。定の「本」を指す場合、例 (9a) が用いられ、不定の「本」を指す場合、例 (9b) が用いられると指摘されている。

- (9) a. **Tôi muốn mua cuốn sách này.**
 私 ~したい 買う 類別詞 本 この
 「私はこの本を買いたい。」 (定)
 b. **Tôi muốn mua một cuốn sách.**
 私 ~したい 買う 一 類別詞 本
 「私は本を一冊買いたい。」 (不定)

(Tran Jennie 2011: 37)

裸名詞に対して、Phan et al. (2022: 476-477)、Trinh Tue (2011: 640) は形式意味論的枠組みで分析を行い、ベトナム語の裸名詞は不定の名詞句であり、定の文脈で現れないと主張している。

- (10) **Chó** thích ăn thịt.
犬 好き 食べる 肉
「犬 (不定/*定) は肉を食べるのが好きだ。」

(Trinh Tue 2011: 640)

- (11) **Chó** muốn sang đường.
犬 ~したい 渡る 道
「犬 (不定/*定) は道を渡りたがる。」

(Phan et al. 2022: 476)

しかし、Cao Xuan Hao (1988: 39) は、裸名詞の *dao* が *the knife*、*a knife*、*the knives*、*knives* のいずれの意味にも相当し、定、不定両方の解釈が可能だということを示している。また、Nguyen Tuong Hung (2004: 42) も同様に、裸名詞が定の名詞句としても不定の名詞句としても解釈されることを主張している。

- (12) **Mang** sách ra đây.
持つ 本 出る ここ
「本をここに持ってきて。」(定/不定)

(Nguyen Tuong Hung 2004: 30)

- (13) **Bò** đang ăn lúa kia!
牛 ている 食べる 稲 あそこ
「(見て、) 牛があそこで稲を食べている。」(定/不定)

(Nguyen Tuong Hung 2004: 43)

例 (12) と例 (13) では、話し手が発話した際、話し手が指している「本」と「牛」を聞き手も認識できると想定する場合、裸名詞の「本」と「牛」は定だと考えられ、反対に、聞き手によって認識されなければ、「本」と「牛」は不定だと考えられる。さらに、Phan & Dong (2021: 7) では、ベトナム語において、裸名詞は主語の位置でも、目的語の位置でも定のように解釈できると述べられている。

- (14) **Sách** rách rồi.
本 破られる 完了
「本が破られた。」(定)

(Phan & Dong 2021: 7)

- (15) **Tôi** làm rách sách rồi.
私 させる 破られる 本 完了
「私はその本を破った。」(定)

(Phan & Dong 2021: 7)

Phan & Dong (2021: 7) では、それに加えて、名詞句の定性解釈が述語のアスペクトにも関わることが指摘されている。例 (14) と (15) は **resultative** であるため、裸名詞は定だと解釈されるが、例 (16) は **episodic** であるため、裸名詞は不定だと解釈される。

- (16) Tôi muốn mua sách
私 ~したい 買う 本
「私は本を買いたい。」(不定)

(Phan & Dong 2021: 7)

三上 (1986: 183) によると、裸名詞は一般に不定の場合に現れる一方、文脈の影響で定の場合でも現れうる。例 (17) では、「thur」(手紙) は先行文脈で言及ずみの名詞であり、その指示物が何であるかは明確に同定されうると述べられている。

- (17) Tôi đưa thư lại cho Khương và hỏi:
私 渡す 手紙 また に (人名) 接続詞 尋ねる
「私はフオンに手紙(一通)を渡して、尋ねた、」(定)

(三上 1986: 183)

以上の先行研究から示唆されているのは、「類別詞＋名詞」は一般的に定の文脈に現れるが、不定の文脈にも現れうるということ。また、裸名詞は一般的に不定の文脈に現れるが、定の文脈にも出現し得るということである。すなわち、定の「類別詞＋名詞」と不定の裸名詞がデフォルトの対応関係をなす一方で、不定の「類別詞＋名詞」と定の裸名詞は例外的な用法であることが、先行研究からうかがえる。

1 節で述べたように、ベトナム語には、定性を表示する義務的な標識が存在しない。そのため、名詞句の定性解釈は文脈に依存している。「類別詞＋名詞」および裸名詞と定性の関係を明らかにするには、文脈を考慮することが極めて重要である。そこで、文脈を考慮した上で考察を行っている先行研究として、2.2 節では、Bisang & Quang (2020)、Simpson et al. (2011)、および Daley (1998) について紹介する。

2.2 文脈を考慮する先行研究およびそれぞれの問題点

Bisang & Quang (2020) は 30 人のベトナム語母語話者に 2 つの映画の内容について報告させる実験を通じて、30 の文章テキストからなる書き言葉コーパスと 30 の口頭テキストからなる話し言葉コーパスを作成し、類別詞の定性について考察している。考察の結果は表 1 にまとめられる。

表 1 「類別詞+名詞」と裸名詞における定・不定の割合¹

	書き言葉コーパス			話し言葉コーパス		
	定	不定	合計	定	不定	合計
類別詞+名詞	1444 (92.0%)	125 (8.0%)	1569 (100%)	680 (91.4%)	64 (8.6%)	744 (100%)
裸名詞	1292 (76.5%)	397 (23.5%)	1689 (100%)	339 (87.8%)	47 (12.2%)	386 (100%)

表 1 によると、「類別詞+名詞」は定と不定のどちらとも解釈されるが、定の文脈に使用される傾向が極めて強い。しかし、Bisang らの研究には少なくとも以下の 2 つの問題点が存在する。まず、用いられるデータは映画を報告させる一人語りである。そのようなデータには、会話参加者としての聞き手は存在しないため、日常生活における類別詞の使用実態は十分には反映されていない。たとえ話し手が聞き手を意識しながら映画の内容を語ったとしても、実験の環境において、より丁寧でフォーマルな表現が使用される可能性がある。したがって、Bisang らの調査結果が限定された特殊な場面で、どれほど一般性があると言えるのかは疑問が残る。また、不定はさらに指示的不定と非指示的不定に細分される (3.2.1.1 参照) ため、定と不定の文脈に出現する各形式を比較する際に両者を区別せずに扱った Bisang らの分析結果は、重要な言語事実を見過ごしている可能性がある。

Simpson et al. (2011) はベトナム語を含む 4 つの言語を対象とし、5 つの定性の文脈 (前方照応、可視的唯一同定、推測による定性、不可視文脈の唯一的なもの、文化慣習の唯一的なもの) について、「類別詞+名詞」と裸名詞の形がそれぞれ上記の定性文脈でどのように使用されるかについて考察を行なっている。その結果、ベトナム語において前方照応の場合、「類別詞+名詞」は裸名詞より容認度が高く、他の 4 つの定性文脈では、「類別詞+名詞」と裸名詞の容認度にあまり大きな差がないということが分かった。また、Simpson et al. (2011: 190) によれば、「類別詞+名詞」は定指示の既定形として機能し、より広範な文脈で自然に認められるが、裸名詞の出現はより制約を受ける傾向があり、不適切と判断されることが多いという。つまり、定の文脈に出現する裸名詞は、特別な説明を要する形式だといえる。

とはいえ、彼らの考察にも注意が必要である。というのも、Simpson et al. (2011) は、ベトナム語を含む 4 つの言語を比較するために、英語で作られたアンケートの調査票を該当言語に翻訳するという形で実験を行っている。しかし、ベトナム語において類別詞の使用は本来義務的ではないため、英語の翻訳文をデータとして考察を行えば、

¹ 表 1 は Bisang & Quang (2020: 22) に基づいて筆者が作成したもの。

英語の定冠詞の影響を受けて、類別詞が用いられやすくなっている可能性がある。

Daley (1998) は 4 つのベトナム語の物語をデータとして扱い、類別詞について考察を行っている。Daley (1998: 59) によれば、「類別詞＋名詞」も裸名詞も、定と不定のいずれのように解釈できる。しかし、類別詞に焦点を当てており、裸名詞については深く考察されていない。また、Daley (1998: 9) 自身も認めているように、用いられるデータが物語であり、書き言葉によるデータであるため、どれほど他の文体に適用できるかは不明である。

2.3 先行研究の問題点のまとめ

ベトナム語において、「類別詞＋名詞」と裸名詞の定性解釈については、従来から意見が分かれているものの、ほとんどの先行研究は定と不定の二通りの解釈が許されることを主張している。ただし、従来の理解では、定の「類別詞＋名詞」と不定の裸名詞、という対応が既定形であり、不定の「類別詞＋名詞」と定の裸名詞の方は、例外的な用法として位置付けられてきた。しかし、こうした理解は、不定をさらに細分類していないことに起因している可能性があり、データの分析方法によっては、異なる結論に導かれる可能性がある。さらに、ベトナム語の母語話者の直感によれば、日常会話において類別詞は必ずしも使用されるとは限らない。しかし、先行研究は限られた場面（語り）に傾き、自然談話における類別詞の使用実態を十分に反映していないという問題点が存在する。

そこで本稿では、自然談話データとアンケートを併用し、定性の細分類にしたがって、「類別詞＋名詞」および裸名詞がそれぞれの定性文脈でどのように用いられるかを明らかにする。

3 調査

3.1 データについて

本稿で用いるデータは、ベトナム語母語話者による自然談話と、アンケート調査の結果の 2 種類である。どちらのデータも、筆者が 2025 年の 3 月から 4 月にかけて行ったフィールドワークの際に収集したものである。まず、自然談話は、北部方言話者である 20 代の女子大学生 2 人によるものである。2 人は親しい間柄であるため、2 人の会話は、「タメロ」の砕けた言葉遣いでなされている。会話の内容は、留学生活についての雑談（約 14 分間）と、ステッカーを貼るゲームをしている場面の会話（約 20 分間）の 2 つに分けられる。一方、アンケート調査は、類別詞の使用が、話し手・聞き手間の関係や発話の丁寧さなどに対してどう関連を持つのか、ということを明らかにする

ために実施した²。これは、「丁寧な発話ほど、類別詞が用いられやすい」という母語話者の報告に基づいている。回答者は 30 名であり、地域・年齢を問わず、北部方言から南部方言まで、様々な話者が含まれている。

3.2 分析方法および分析結果

3.2.1 自然談話

収集したデータは 2 人の自然談話の参加者本人の協力のもとで書き起こされた。2 つの自然談話から約 4000 語の談話コーパスが作られた。分析手順としては、まず、名詞を含む例文を取り出す。次に、取り出された例文における名詞に対して、類別詞を伴うかどうかによって、出現形式ごとに頻度を計算する。また、各名詞の出現環境を分析し、指示物の定性を判断する。

3.2.1.1 定性の判断基準

本稿においては、Givón (1984: 393-397) にしたがって、以下の基準によって、名詞句の定性を判断する。話し手と聞き手により同一の指示物が定まる場合、指示的定の名詞句 (REF-DEF) として判断し、話し手が言及する指示物に対して、聞き手が同定できなければ、指示的不定の名詞句 (REF-INDEF) として判断し、話し手が言及する物が非指示的な場合、非指示的名詞句 (NON-REF) として判断する。この基準にしたがうと、以下の例における *ký túc xá* (寮) はそれぞれ NON-REF、REF-INDEF、REF-DEF のように判断できる。

NON-REF

(18)	Năm	vừa rồi	là	phải	đi	trao đổi
	年	去る	コピュラ	助動詞	行く	交換
	ở	đại học	Nhật	thì	mày	ở ký túc xá
	に	大学	日本	主題	お前	に 寮
	hay	là	mày	ở	trọ?	
	或いは	コピュラ	お前	に	下宿	

「去年、日本の大学に留学に行った時は寮に住んでたの、下宿してたの?」

²本稿の調査にあたり、丁寧な発話の場面の自然談話が採れなかったため、代わりにアンケート調査の形で調査を行った。アンケート調査は規範意識が反映される可能性が高いと思われるが、今回のアンケート調査は類別詞の使用と丁寧さの相関の存在を示す価値があると考えられる。

REF-INDEF

- (19) Ở ký túc xá tòa quốc tế, hình như là tòa mới
 に 寮 棟 国際 多分 コピュラ 棟 新しい
 nhất hay sao ý
 一番 かもしれない
 「国際の寮に住んでたよ、多分一番新しい建物かもしれない。」

REF-DEF

- (20) Thế, trong ký túc xá có những gì?
 じゃ、 中 寮 ある 複数 何?
 「じゃ、寮の中に何があるの?」

3.2.1.2 分析結果

名詞の出現形に関して、裸名詞と「類別詞＋名詞」それぞれの出現頻度を計算した。

REF-DEF、REF-INDEF、NON-REF の文脈における出現頻度は、表 2 の通りである。

表 2 「類別詞＋名詞」と裸名詞の各文脈における出現率（本稿の調査結果）

	定	不定		合計
	REF-DEF	REF-INDEF	NON-REF	
類別詞＋名詞	37 (82.2%)	8 (17.8%)	0	45 (100%)
裸名詞	44 (31%)	32 (22.5%)	66 (46.5%)	142 (100%)

表 2 によると、「類別詞＋名詞」は先行研究が指摘した通り、定の文脈に現れやすいことが分かる。しかし、「類別詞＋名詞」と裸名詞の合計数に関しては、表 3 の Bisang & Quang (2020) の話し言葉コーパスに基づいた結果と相違点が見られる。

表 3 話し言葉コーパスに基づく調査結果（Bisang & Quang 2020, 表 1 の一部再掲）

	話し言葉コーパス		
	定	不定	合計
類別詞＋名詞	680 (91.4%)	64 (8.6%)	744 (100%)
裸名詞	339 (87.8%)	47 (12.2%)	386 (100%)

表 2 と表 3 を比べると、以下のことが分かる。a. 自然談話において、裸名詞の出現頻度は「類別詞＋名詞」よりかなり多い。b. 非指示的文脈に限って見れば、裸名詞が常に用いられ、類別詞は全く現れないため、Bisang (1999)、Löbel (2000) が提案する、類別詞の指示機能が実証された。c. 表 2 によると、類別詞は非指示的文脈において全く現れないため、表 3 で Bisang らが対照している、「類別詞＋名詞」の「定・不定」というのは、REF-DEF と REF-INDEF の場合の出現度である可能性が高い。d. 一方、裸名詞に

関しては、Bisang らが表 3 で「定の裸名詞」と呼んでいるのは、REF-DEF のことで相違ないが、「不定の裸名詞」と呼んでいるのは、実際には、REF-INDEF および NON-REF の 2 つが混ざったものである可能性がある。Bisang らのデータの分析方法が間違っているとは言えないが、指示性を考慮に入れずに定性を議論する場合、名詞句の指示解釈に関わる重要な区別が見落とされ、分析の精度に限界が生じる可能性がある。e. 本稿の調査結果によると、確実に言えることは、類別詞は指示的文脈のみに現れる。言い換えると、類別詞は非指示的文脈では現れないが、それ以外の文脈では自由に出現する。出現傾向に関して、「類別詞＋名詞」は指示的定の文脈における出現率がより高いが、裸名詞は 3 つの定性文脈における出現傾向に大きな差がないということが言える。f. さらに、REF-DEF の文脈に限って見れば、裸名詞の全体的な出現度が多いため、REF-DEF を表す手段として、「類別詞＋名詞」より、裸名詞の出現頻度が高い。

3.2.2 アンケート調査

丁寧な発話の場面と丁寧ではない発話の場面に応じて、類別詞の使用に差があるかどうかを調査するため、本稿では、アンケート調査を実施した。アンケートの参加者情報は次の通りである。年齢に関して、10 代が 7 名、20 代が 14 名、30 代が 8 名、50 代が 1 名；性別に関して、男性が 8 名、女性が 22 名；地域に関して、北部出身が 16 名、南部出身が 9 名、中部出身が 1 名、未記録が 4 名。

アンケート調査票の内容は全て筆者による作例である。会話の中で、話し手が既に言及した名詞に対して、聞き手にもう一度言及される際に、裸名詞を用いる文と「類別詞＋名詞」を用いる文の自然さを五段階評価（1: とても不自然；2: やや不自然；3: どちらともいえない；4: やや自然；5: とても自然）で判断してもらう形で実施した。ベトナム語の母語話者によると、類別詞を用いる表現はより丁寧なイメージがあるため、日常生活の中で、親しい友達の間で、類別詞を用いる場合は少ない一方、目上の人と話す際に用いられやすいという。そこで、調査票を作成する中で、話し手と聞き手の関係も考慮し、親しい友達との会話と、先生との会話という 2 つの場面を設定した。1 つの場面につき 13 問が設けられ、合計で 26 問ある。調査した結果、友達同士の会話で、裸名詞が「類別詞＋名詞」より自然だと明確に言える例は 13 問の中から 4 問が確認された。次に、その 4 問のうち、2 問に対して、調査結果について述べる。

(21) 2 人の仲がいい友達同士の会話

A: Đây là cây bút tôi mang từ khách sạn.
これ コピュラ 類別詞 ペン 私 持つ から ホテル
「これは私がホテルから持ってきたペン。」

B:

- a. Bút dùng tốt không?
ペン 使用 良い 否定
- b. Cây bút dùng tốt không?
類別詞 ペン 使用 良い 否定
- c. Bút đó dùng tốt không?
ペン その 使用 良い 否定
- d. Cây bút đó dùng tốt không?
類別詞 ペン その 使用 良い 否定
- 「ペンは使いやすいの？」

例 (21) の a-d は、それぞれ (a) 裸名詞を用いる文、(b) 「類別詞+名詞」を用いる文、(c) 「名詞+指示詞」を用いる文、(d) 「類別詞+名詞+指示詞」を用いる文である。a-d の自然さに対して、30 名の協力者のうち、29 名が回答した。結果は図 1-4 に示す。

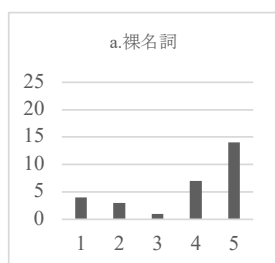


図 1. 例 (21a)

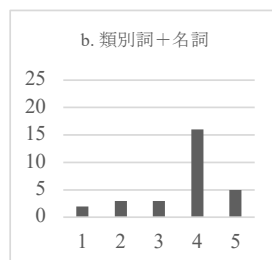


図 2. 例 (21b)

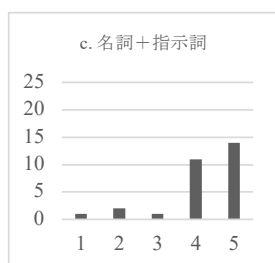


図 3. 例 (21c)

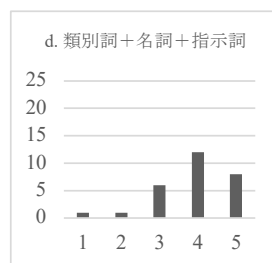


図 4. 例 (21d)

例 (21) の a と b および c と d の差を評価するために、Mann-Whitney U Test を実施した。検定した結果、a と b の間に統計的に有意な差が認められた ($p < 0.05$)。また、c と d の間にも統計的に有意な差が認められた ($p < 0.05$)。a と b の結果によると、日常

会話において親しい友達同士の会話では、話し手が言及した指示対象に対して、聞き手が再度言及する際、「類別詞＋名詞」よりも裸名詞が使用されやすい傾向があると考えられる。さらに、c と d の結果からは、指示詞と名詞を組み合わせた場合でも、類別詞を伴わないパターンがより使用されやすいことが示唆される。

(22) 文脈: 2 人の友達が美術館に行って、たくさんの写真を撮った。帰り道、片方がもう片方に写真を送ってほしいと頼んだ。

A: Hôm nay tôi đã chụp cho bạn một bức ảnh.
今日 私 過去 撮る に あなた 一 類別詞 写真

B:

「今日私はあなたに写真を一枚撮った。」

- a. Gửi ảnh cho tao nhé.
送る 写真 に 私 ね
- b. Gửi bức ảnh cho tao nhé.
送る 類別詞 写真 に 私 ね
- c. Gửi ảnh đó cho tao nhé.
送る 写真 その に 私 ね
- d. Gửi bức ảnh đó cho tao nhé.
送る 類別詞 写真 その に 私 ね

「写真を送ってね？」

例 (22) の a-d は、それぞれ (a) 裸名詞を用いる文、(b) 「類別詞＋名詞」を用いる文、(c) 「名詞＋指示詞」を用いる文、(d) 「類別詞＋名詞＋指示詞」を用いる文である。

a-d の自然さに関して、30 名の協力者のうち、a に対して 29 名が回答し、b、c、d に対してはそれぞれ 28 名が回答した。その結果を以下の図 5-8 に示す。

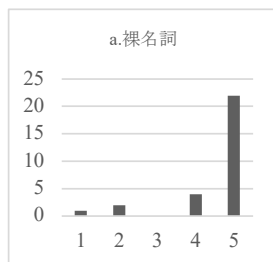


図 5. 例 (22a)

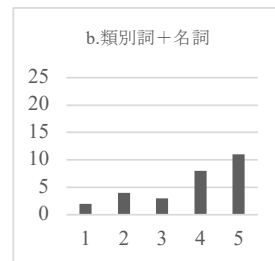


図 6. 例 (22b)

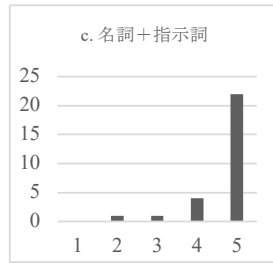


図 7. 例 (22c)

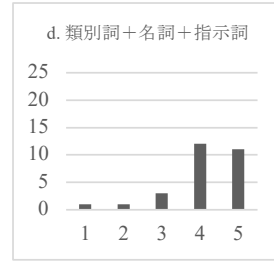


図 8. 例 (22d)

例 (22) の a と b および c と d の調査結果に対して Mann-Whitney U Test を行った結果、a と b の間に統計的に有意な差が認められた ($p < 0.05$)。また、c と d の間にも統計的に有意な差が認められた ($p < 0.05$)。例 (22) の結果は例 (21) と同様の傾向が示されている。つまり、日常会話において「類別詞+名詞」よりも裸名詞がより使用されやすい。また、指示詞と名詞を組み合わせた場合でも、類別詞を伴わないパターンの使用がより自然だということが考えられる。

次に、例 (21)、(22) のペアとなる先生と会話する場面の例文を提示する。

(23) 学生と先生との会話。A: 先生; B: 学生

A: Đây là cây bút cô/thầy mang từ khách sạn.
 これ コピュラ 類別詞 ペン 先生 持つ から ホテル
 「これは私がホテルから持ってきたペン。」

B:

a.	Bút ペン	dùng 使用	tốt 良い	không 否定	ạ? 語気助詞	
b.	Cây 類別詞	bút ペン	dùng 使用	tốt 良い	không ạ? 否定 語気助詞	
c.	Bút ペン	đó その	dùng 使用	tốt 良い	không ạ? 否定 語気助詞	
d.	Cây 類別詞	bút ペン	đó その	dùng 使用	tốt 良い	không ạ? 否定 語気助詞

「ペンは使いやすいですか？」

上の例と同様に、例 (23) の a-d は、それぞれ (a) 裸名詞を用いる文、(b) 「類別詞+名詞」を用いる文、(c) 「名詞+指示詞」を用いる文、(d) 「類別詞+名詞+指示詞」を用いる文である。a-d の自然さに関して、30 名の協力者のうち、a、b、d に対して 29 名が回答し、c に対して 28 名が回答した。その結果を以下の図 9-12 に示す。

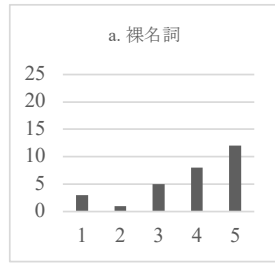


図 9. 例 (23a)

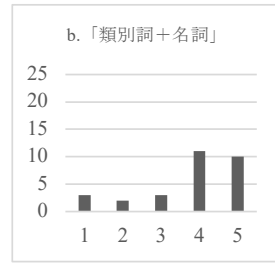


図 10. 例 (23b)

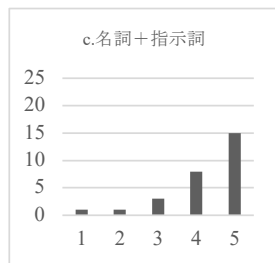


図 11. 例 (23c)

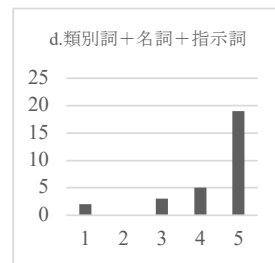


図 12. 例 (23d)

例 (23) の a と b および c と d の調査結果に対して Mann-Whitney U Test で検定した結果、a と b、c と d の間に統計的に有意差が認められなかった ($p>0.05$)。この結果によると、先生との会話の場合、類別詞が付く形式と類別詞が付いていない形式の自然さに大きな違いがないということが分かる。

また、図 9-12 によると、類別詞の代わりに、指示詞の有無によって文の自然さに差が存在する可能性がある。指示詞による文の自然さの差を明らかにするため、上と同様な手法で例 (23) の a と c、b と d に対して検定を行った。その結果、a と c の間に有意な差は認められなかった ($p>0.05$)。一方、b と d の間に有意な差は認められた ($p<0.05$)。つまり、先生との会話の場合、「類別詞+名詞」に対して、指示詞が付く形式は、指示詞が付いていない形式より自然だということが示唆される。なお、指示詞による自然さの差は友達同士の会話の例 (21) からは観察されなかった。

次に、例 (22) のペアとして、例 (24) を以下にあげる。

(24) 文脈: 学生と先生が美術館に行って、先生は写真を撮った。A: 先生; B: 学生

A: Hôm nay cô/thầy đã chụp cho bạn một bức ảnh.
 今日 先生 過去 撮る に あなた 一 類別詞 写真
 「今日私はあなたに写真を一枚撮った。」

B:

- a. Thầy có thể gửi ảnh cho em được không ạ
 先生 可能 送る 写真 に 私 できる 否定 語気助詞
 b. Thầy có thể gửi bức ảnh cho em được không ạ
 先生 可能 送る 類別詞 写真 に 私 できる 否定 語気助詞
 c. Thầy có thể gửi ảnh đó cho em được không ạ
 先生 可能 送る 写真 その に 私 できる 否定 語気助詞
 d. Thầy có thể gửi bức ảnh đó cho em được không ạ
 先生 可能 送る 類別詞 写真 その に 私 できる 否定 語気助詞
 「写真を送っていただけないでしょうか?」

例 (24) の a-d は、それぞれ (a) 裸名詞を用いる文、(b) 「類別詞+名詞」を用いる文、
 (c) 「名詞+指示詞」を用いる文、(d) 「類別詞+名詞+指示詞」を用いる文である。

a-d の自然さに関して、30 名の協力者のうち 29 名が回答した。その結果を以下の図 13-16 に示す。

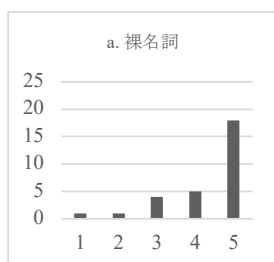


図 13. 例 (24a)

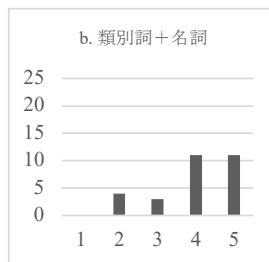


図 14. 例 (24b)

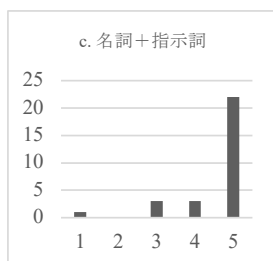


図 15. 例 (24c)

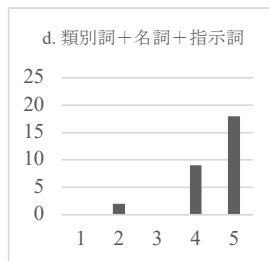


図 16. 例 (24d)

例 (24) の a と b および c と d の調査結果に対して Mann-Whitney U Test で検定した結果、a と b の間および c と d の間にいずれも統計的に有意差が認められなかった ($p>0.05$)。この結果によると、例 (23) と同様に、先生との会話の場合、類別詞が付く形式と付いていない形式の自然さに大きな違いがないということが分かる。

また、指示詞の有無によって文の自然さに差が存在するかどうかを明らかにするため、上と同様な手法で例 (24) の a と c および b と d に対して検定を行った。その結果、a と c の間に有意な差は認められなかった ($p>0.05$) が、b と d の間に有意な差は認められた ($p<0.05$)。つまり、例 (23) と同様な結果が導かれた。このことから、先生との会話の場合、「類別詞+名詞」に対して、指示詞が付く形式は、指示詞が付いていない形式より自然だということが明らかになった。また、例 (23) と同様に、指示詞による自然さの差は友達同士の会話の例 (22) からは観察できなかった。

3.2.3 まとめ

本稿では、ベトナム語において、裸名詞と「類別詞+名詞」が、それぞれの定性文脈においてどう出現するかを明らかにするため、自然談話をデータとして調査を行った。また、類別詞の使用に関して、それが丁寧さに関わるかどうかを明らかにするため、アンケート調査を実施した。それぞれの調査結果は以下のようにまとめられる。

(25) 自然談話の調査結果

- a. 定の文脈と不定の文脈を問わず、裸名詞の方が全体的な出現頻度が高い一方で、「類別詞+名詞」の出現頻度は相当低い。
- b. 「類別詞+名詞」は指示的文脈にのみ出現するため、類別詞の指示機能が検証された。つまり、類別詞は非指示的文脈では現れないが、それ以外の場合、自由に現れる。
- c. 「類別詞+名詞」は指示的定の文脈における出現率がより高いが、裸名詞は 3 つの定性文脈における出現傾向に大きな差がない。
- d. 指示的定を表す手段として、「類別詞+名詞」よりも、裸名詞の方が用いられやすい。

(26) アンケート調査の結果

- a. 友達同士の間で裸名詞が「類別詞+名詞」より自然だと明確に言える例は 13 問の中から、4 問が確認された。丁寧さが必要ではない場面では、類別詞が使用されにくいという現象が確認されたため、類別詞の使用が丁寧さと関わることが明らかになった。

- b. 友達同士の間で、「類別詞＋名詞」が裸名詞より自然だと明確に言える例は見られなかった。つまり、裸名詞が「類別詞＋名詞」よりも自然である場合と、裸名詞と「類別詞＋名詞」の自然さに差がない場合の 2 パターンしかないということが言える。
- c. 先生と会話する場合、裸名詞が「類別詞＋名詞」より自然だと明確に言える例は見られなかった。また、「類別詞＋名詞」が裸名詞より自然だと明確に言える例も見られなかった。つまり、丁寧さが必要な場面で、裸名詞と「類別詞＋名詞」の自然さに大きな差がないということが言える。
- d. 先生と会話する場合、「類別詞＋名詞＋指示詞」が裸名詞、「類別詞＋名詞」、「名詞＋指示詞」より自然な場合が観察されたが、友達同士の会話では観察されなかった。

4 考察

3 節の調査によると、類別詞は日常生活において常に用いられるわけではない傾向にある。つまり、定・不定を問わず、裸名詞の出現度がより高い。また、指示的定を表す手段として、「類別詞＋名詞」の代わりに、裸名詞の方がより用いられやすいということが言える。さらに、友達間のカジュアルな会話では、裸名詞がより自然な場合があることが確認され、先生との丁寧な会話では、「類別詞＋名詞＋指示詞」の方がより自然な場合があることも確認された。

ここまで自然談話における類別詞の使用に焦点を当て調査してきたが、類別詞の有無に関しては名詞句の内部構造から説明することができる。Rijkhoff (2002: 37) によると、名詞句の内部構造の複雑さには、様々な要因が関わっている。本節では、Rijkhoff (2002: 37-42) が提示した、文体、丁寧さ、情報量という三つの要素を中心に 3 節の調査結果を議論する。

4.1 類別詞の使用と文体

Linell (2004)、Perkins (1992: 89) などによると、書き言葉で用いられる名詞句は、話し言葉で用いられる名詞句よりも統語的に複雑になる傾向がある。Olson & Hildyard (1983: 306) では、書き言葉と話し言葉の違いについては以下のように述べている。話し言葉では、話し手は、聞き手が誤解しているように見える場合、文の途中で表現を変えることができる。しかし、書き言葉では、読者に伝えられた時点で既に適切な表現になっているものと想定されるため、書き手は、どんな読者でも、その文の言語構造を文脈に当てはめ、意図された意味を理解できるようにしなければならない。つ

まり、書き言葉は、意図したことを、どうやったら明確に表現できるのか、を書き手にじっくり考えることを要求する。また、Meletis & Dürscheid (2022: 31-42) でも、Olson らと似た仕方で、話し言葉と書き言葉の違いについて議論がなされている。書き言葉は文字コミュニケーションであり、相手がある場合におらず、共有された文脈が存在しないため、より明示的な表現が必要である。一方、話し言葉は音声コミュニケーションであり、話し手と聞き手が共有する知覚的空間の中に、「ここ」、「今」といった表現が指す場所や対象が存在しているため、そういった直示的表現を自由に用いることが可能である。また、話し言葉では、文法的に不完全な文構造、方言的表現、口語表現、省略、自己修正、談話助詞などが多くみられ、聞き手は話し手の直前の発話に直接反応するために代名詞などを用いることができるが、書き言葉では、話し言葉より明示的で、より形式的かつ厳密な表現が用いられ、指示文脈に対しても明確に示さなければならない。さらに、Koch & Oesterreicher (2012: 450) では、話し言葉の発話は精緻化されておらず、書き言葉の発話よりも形式的ではないということが指摘されている。音声的コミュニケーションと文字的コミュニケーションの伝達方略として、情報密度、緊密性、統合性、複雑性、精緻さ、計画性といった 6 つのレベルにおいて、話し言葉と書き言葉は両極にあるということが示されている。

以上の指摘によると、本稿で用いた、自然談話のデータに基づく類別詞の使用実態は、書き言葉で観察された結果と異なる可能性が極めて高いということが分かる。本稿のデータと Bisang & Quang (2020) のデータにおいて、裸名詞の出現頻度に差があることは、以下のように説明できる。自然談話では、話し手と聞き手は同じ空間にいるため、発話意図がうまく伝えられるに限りにおいて、より単純な裸名詞が用いられやすい。一方、書き言葉では、より適切な表現が求められ、指示対象をより明確に示す必要があるため、より複雑な形である「類別詞＋名詞」が用いられやすい。Bisang & Quang (2020) は書き言葉コーパスと話し言葉コーパスの両方を作成しているが、後者は独話に基づいているため、必ずしも自然な話し言葉を反映しているとは言えない。また、Simpson et al. (2011) と Daley (1998) が用いたデータはいずれも書き言葉であるため、話し言葉における類別詞の使用実態は反映されていない。したがって、本稿で行なった調査は、従来の先行研究と異なり、類別詞の使用を明らかにする上で極めて価値があると言える。

4.2 類別詞の使用とポライトネス

Haiman (1985) はポライトネス、タブー的状況、話し手と聞き手の間の親密さといった要因も、言語表現の内部構成に影響を及ぼす可能性があることを示している。Haiman (1985: 151) によると、丁寧な発話では、長くて複雑な表現が必要とされる。

本稿の調査によると、友達との間のカジュアルな会話では、裸名詞がより自然であり、先生との丁寧な会話では、「類別詞＋名詞＋指示詞」という複雑な表現がより自然であることが確認された。この現象は Haiman の指摘と一致している。さらに、この現象は Brown & Levinson のポライトネス理論によっても説明できる。ポライトネスはフェイスに配慮した言語行動のことである。コミュニケーションを円滑に行うためには、フェイス侵害の大きさに応じた補償をすることが必要となり、そういった補償するような発話はポライトネスである（今井ほか 2021: 70-71）。フェイスは、他者に肯定的な自己イメージを承認してもらいたい、評価されたいというポジティブフェイスと、自己領域を妨害されたくない、干渉されたくないというネガティブフェイスに分けられている（Brown & Levinson 1987: 61）。フェイスを侵害する言語行動は Face Threatening Act という。フェイス侵害の程度は話し手と聞き手の社会的距離（D）、権力関係（P）、特定文脈における言語行動の負担度（R）に関わる。Brown & Levinson（1987: 80-81）では、D、P、R の値の差に応じて異なる言語表現が用いられることを例示している。例えば、P と R の値は一定の場合、話し手と聞き手の社会的距離（D）があるとき、例（27a）が用いられ、社会的距離が近いとき、例（27b）が用いられる。

- (27) a. Excuse me, would you by any chance have the time?
b. Got the time, mate?

(Brown & Levinson 1987: 80)

例（27a）は見知らぬ人への依頼で、社会的距離が大きい場合に適する表現であり、例（27b）は友人や親しい人に対する発話で、話し手と聞き手の社会的距離が近い場面で自然に用いられるカジュアルな表現である。例（27a）は聞き手のネガティブフェイスに配慮した丁寧な戦略が採用されている。一方、例（27b）は聞き手のポジティブフェイスに働きかけ、カジュアルで直接的な戦略を選択している。この対比が示すのは、同じ「時刻を尋ねる」という行為であっても、社会的距離に応じて話し手は異なる戦略を選択するという点である。すなわち、社会的距離はポライトネス戦略の選択における重要な変数の1つであることが言える。

また、D と R の値が一定の場合、話し手と聞き手の社会権利（P）の差が大きいとき、例（28a）が用いられ、社会権利の差が小さいとき、例（28b）が用いられる。

- (28) a. Excuse me sir, would it be all right if I smoke?
b. Mind if I smoke?

(Brown & Levinson 1987: 80)

例（28a）は部下が上司に尋ねる場合に適切な表現であり、例（28b）は上司が部下に尋ねる場合に適切な表現である。例（28a）は聞き手のネガティブフェイスに対する最大限の配慮が求められるため、丁寧で間接的な表現が選択される。一方、例（28b）は聞き手のフェイスに対する配慮の必要性が相対的に低いため、より直接的かつ簡潔な表現が許容される³。

以上の指摘によると、ポライトネス理論では、話し手と聞き手の社会的距離（D）、権力関係（P）は具体的な言語表現に大きな影響を与えることが確認された。本稿の調査結果もポライトネス理論によって説明できる。つまり、友達同士のカジュアルな発話では、話し手と聞き手の社会距離が小さく、権力関係もない。そこで、聞き手のネガティブフェイスに対する配慮が低いため、話し手は簡潔な表現を用いる。逆に、複雑な表現を使用すれば、聞き手に親しい仲間として認められにくく、肯定的な自己イメージが承認されなくなる可能性が高いため、聞き手のポジティブフェイスに影響する可能性がある。したがって、カジュアルな場面では、裸名詞が一番自然で適切な戦略として選択される。一方、目上の先生との会話では、話し手と聞き手の社会距離や権力関係がある。学生が先生のネガティブフェイスに配慮するため、より明示的で長い表現の「類別詞＋名詞＋指示詞」が戦略として用いられる。

実際、本稿の調査では、先生との会話では、「類別詞＋名詞＋指示詞」がより自然であることが確認されたが、裸名詞と「類別詞＋名詞」にはあまり差がないという結果が出ている。また、親しい友達とのカジュアルな会話では、裸名詞がより自然な場面があることが確認されたが、一方で、裸名詞と「類別詞＋名詞」で自然さにあまり差がない場合も相当数確認されている。そこで、各形式が、2つの場面においてどれだけ自然かを見るため、13問の調査結果に基づき、形式ごとに自然さ 1~5 の評定を人数で加重平均し、各形式の自然さのスコアの平均値を計算した。その結果は表 4 にまとめる。

表 4 二つの場面における各形式の自然さのスコア（平均値）

	親しい友達との会話	先生との会話
裸名詞	3.96	4.10
類別詞＋名詞	3.78	4.24
名詞＋指示詞	3.85	4.15
類別詞＋名詞＋指示詞	3.81	4.38

³ P（権力関係）と D（社会距離）のほかに、発話内容の負担度（R）も、話し手が用いる表現の選択に影響を与える重要な要因である。R の値が高い場合、話し手は謝罪や迂言など、ネガティブポライトネスに基づく表現を選びやすい。一方、R の値が低い場合、ポジティブポライトネスに基づく簡潔な表現が選択されやすい。

表 4 によると、全体的に各形式の自然さのスコアに大きな差が見られなかったが、親しい友達との会話では裸名詞、先生との会話では「類別詞＋名詞＋指示詞」がわずかに優位であることが確認された。

さらに、場面要因と形式要因がどれほど自然さに影響するかを見るために本稿では自然さのスコアについて、場面（友達との会話/先生との会話）と形式（裸名詞/類別詞＋名詞/名詞＋指示詞/類別詞＋名詞＋指示詞）を要因とする二要因分散分析（ANOVA）を実施した。結果は以下の通りである。

場面の主効果が統計的に有意であった（ $F(1, 84) = 15.71, p < 0.05$ ）。一方、形式の主効果は有意ではなかった（ $F(3, 84) = 0.20, p > 0.05$ ）。また、場面と形式の交互作用も有意ではなかった（ $F(3, 84) = 1.10, p > 0.05$ ）。これらの結果は、場面の違いによって自然さのスコアが有意に変化するが、その効果の大きさは形式の種類に依存しないことを示している。分散分析では、場面の主効果に有意差が検出されたが、具体的にどの形式に差があるかを調べるため、本稿ではさらに t 検定を実施した。その結果、「類別詞＋名詞」（ $t = -2.18, p < 0.05$ ）と「類別詞＋名詞＋指示詞」（ $t = -3.03, p < 0.05$ ）の条件の下に先生との会話の場面での自然さスコアが友達との会話の場面に比べて有意に高かった。一方、裸名詞（ $t = -0.54, p > 0.05$ ）及び「名詞＋指示詞」（ $t = -1.42, p > 0.05$ ）の条件では、場面間の有意差は認められなかった⁴。

以上の結果から、場面の違いは表現の自然さに強く影響を与え、特に複雑な形式（類別詞＋名詞、類別詞＋名詞＋指示詞）において、先生との会話がより高い評価を得ることが明らかになった。この結果は本節の最初で述べたように、Brown & Levinson (1987) のポライトネスの理論に関する主張と一致している。

4.3 類別詞の使用と情報量

名詞句の複雑さは Grice (1975) が提案した「協調性原理」にも関わる。「協調性原理」では 4 つの格率が主張され、その中、「量の格率」は話し手が適切な情報量を提供しなければならないことを強調する。つまり、a. 求められている情報を提供しなさい。b. 求められている以上の情報を提供してはいけない（今井ほか 2021: 44）ということである。つまり、発話が提供する情報量は少なすぎてもいけないし、多すぎてもいけないということを示している。この原則にしたがえば、既に明らかな情報に対して冗長な言語形式を使うのは不自然であり、逆に新規で予測できない情報には、十分な情報量が含まれる表現が必要だと言える。これは、自然談話において、定を表す手段とし

⁴ 統計の結果は以下のウェブサイトから確認できる。
<https://colab.research.google.com/drive/1O5qsRPMw2QaHogEaZ3d7S0yrA-JiU804?hl=ja#scrollTo=YJwpQcJoz-J7>

て、「裸名詞」が「類別詞＋名詞」よりも用いられやすいという本稿の結果と一致している。実際、ベトナム語では、定を表す他の手段として、ほかに省略、代名詞など、冗長さを避けるような形式が存在する。本稿では、裸名詞と「類別詞＋名詞」の使用実態を主に調査したが、調査実施の中で、省略と代名詞を含む表現の自然さに対して、2問を設けて調査を行なった。2問とも同じ結果が得られたが、以下、その1問に対して、結果を示す。

(30) 2人の仲がいい友達同士の会話

- A: Ban đã ăn gì.
あなた 過去 食べる 何
「あなたは何を食べた。」
- B: Tôi đã ăn một quả táo.
私 過去 食べる 1 類別詞 りんご
「私はりんごを1つ食べた。」
- A: a. Táo có ngon không?
りんご 存在 美味しい 否定
b. Quả táo có ngon không?
類別詞 りんご 存在 美味しい 否定
c. Táo đó có ngon không?
りんご その 存在 美味しい 否定
d. Quả táo đó có ngon không?
類別詞 りんご その 存在 美味しい 否定
e. (Có) ngon không?
(存在) 美味しい 否定
f. Nó có ngon không?
代名詞 存在 美味しい 否定
「りんごは美味しいの？」

例 (30) の a-f は、それぞれ (a) 裸名詞を用いる文、(b) 「類別詞＋名詞」を用いる文、(c) 「名詞＋指示詞」を用いる文、(d) 「類別詞＋名詞＋指示詞」を用いる文、(e) 指示名詞を省略する文、(f) 代名詞を用いる文である。a-f の自然さに関して、30名の協力者が回答した。その結果を以下の図 17-22 に示す。

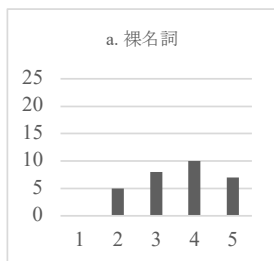


図 17. 例 (30a)

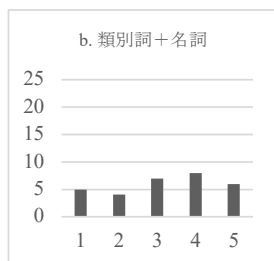


図 18. 例 (30b)

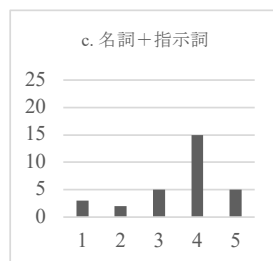


図 19. 例 (30c)

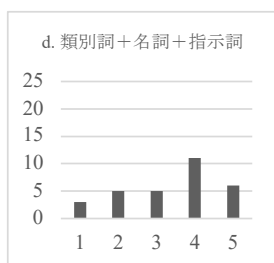


図 20. 例 (30d)

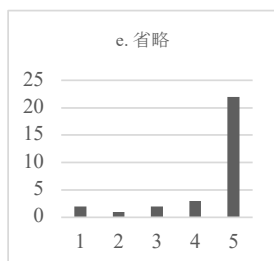


図 21. 例 (30e)

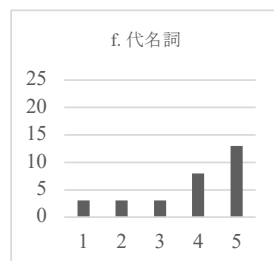


図 22. 例 (30f)

図 17-22 が示した調査結果から分かることは、日常会話において、前文で言及されたものに対して、省略 (図 21) や代名詞 (図 22) が指示手段としてより自然だとされ、裸名詞や「類別詞+名詞」など他の形式は、あまり自然とは言えないことが分かる。これは Grice (1975) の「量の格率」によっても説明できる。つまり、既知の情報に対して、ちょうど良い情報量を持つ形式がより自然であり、カジュアルな会話では、話し手が取り上げた名詞に対して、聞き手がもう一度言及するとき、省略、代名詞、重複、他の要素 (類別詞、指示詞) を付け加える形式などの戦略の中で、よりスムーズなコミュニケーションをなすため、一番明瞭かつ情報量が少ない形式が用いられる。

さらに、どの形式がより用いられやすいかは、話者同士の関係にも関わる。話し手と聞き手は親しい友達の関係の場合、再述的で冗長な形式を避けるため、省略戦略が一番良いと評価されるが、一方、場面や話者の関係が変われば、省略形式の許容度が下がる場合もある。以下図 23 と図 24 は例 (30) の質問に対して、学生と先生の場合を想定して省略形式の文と代名詞を用いる文の自然さに対する調査結果である。

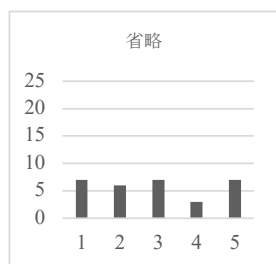


図 23. 先生との会話 省略

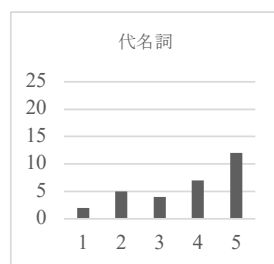


図 24. 先生との会話 代名詞

図 23-24 によると、先生との会話の場合は代名詞の許容度にあまり差が見られないが、省略形式の許容度がかなり下がった。これは、4.2 節で述べたポライトネス理論にも関わる。つまり、カジュアルな場合、相手との親しさを表し、仲間内であることを示すことで、相手との距離を縮める。そのため、話し手は聞き手のポジティブフェイスに

配慮し、省略戦略を選択する。一方、先生との会話では、先生のネガティブフェイスを侵害しないような配慮をするため、省略ではなく、より完全で明示的な表現が用いられる。

以上では、「裸名詞」は「類別詞＋名詞」より用いられやすいという本稿の調査結果に対して、Grice (1975) の「量の格率」を用いて説明を行なった。また、場面に応じて指示手段の選択が変わることはポライトネス理論に関わることについても分析を行なった。Grice の「量の格率」と同じ主張を持っているのは、Givón (1988) のコードと情報量の原則 (code-quantity principle) が挙げられる。Givón (1988: 249) では、話題性 (topicality) を測る実験を通じて、指示対象の予測可能性とそれを符号化する形式の音韻的量との間に逆相関があることが指摘された。つまり、最も予測可能な指示対象は最も短い形式で符号化されるが、最も予測困難な指示対象は最も長い形式で符号化されるということである。この原則によれば、すでに談話内で確立された指示対象を指す形式には、通常それほど多くの言語的要素は含まれず、しばしばゼロ照応や、代名詞的要素だけで円滑なコミュニケーションができることが分かる。逆に言うと、指示対象が予測しにくい、アクセスしにくいほど、それを表現するために使用される言語情報量は多くなる。

以上を踏まえ、本稿の調査結果は以下のように説明できる。定の文脈に出現する名詞句は既知情報であり、より簡潔な形式が用いられるため、「類別詞＋名詞」の代わりに、裸名詞がより用いられやすい。同様に、親しい友達との会話の場合、既知情報に対して、アクセスしやすいため、ゼロ照応の形式が用いられやすい。逆に、先生との会話の場合、ポライトネスに働きかけ、より明示的な表現が必要とされ、「類別詞＋名詞＋指示詞」が用いられやすい。

4.4 本稿の主張

ここまでの議論では、すでに談話内で確立された既知のものに対して、情報量が少ないものが用いられるため、省略形式や、裸名詞が許容されやすいが、予測されにくい未知のものに対しては、類別詞がつくようなより多くの構成要素を含む形式が用いられる、ということを見てきた。しかし、これは、「類別詞＋名詞」は定名詞句を標示するという従来の定説とは相違している。定の名詞句は、既知の旧情報であるため、簡潔な形式が用いられるはずだが、なぜ類別詞がつく形式がより多く用いられるのだろうか。それは、類別詞の使用は、実は、定性ではなく、他の要因によって要求されるものだからである。

本稿の調査結果 (表 2) では、指示的定の文脈で現れた「類別詞＋名詞」は 37 件確認されたが、そのうち、20 件は有生名詞だった。Bisang & Quang (2020) では、主語

に定の有生名詞が来る場合は、「類別詞＋名詞」が使用される傾向が強いことが指摘されており、本調査結果も、この点では、彼らの主張と矛盾しない。一般に有生名詞は、個別度 (individuation) が高い、すなわち、具象度が高くて他との境界が明確な指示対象を持つ形式である。三上 (1986; 2005) によると、類別詞には、それが付加された形式の個別度を高める機能があるという。しかし、この三上の論にしたがうならば、本調査で 37 回現れた、指示的定の「類別詞＋名詞」の約半数 (20 件) は、定だからという理由ではなく、寧ろ、個別度の高い有生名詞だからという理由で、類別詞が付加されていたことになる。

では、何故、定であることが、あたかも類別詞付加の条件であるかのように見えていたのだろうか？それは、別の理由によるものである。Comrie (1989: 128) では、有生性と定性が高い主語と、有生性と定性が低い目的語からなる他動詞構文が、最も自然な構造だと示されている。つまり、一般的に主語位置に現れる有生名詞は定になる可能性が高い。この「主語は有生・定になりやすい」という傾向と、先述の「有生名詞は個別度が高い」という傾向が合わさった結果、「定の名詞に対して類別詞が付加される」というミスリーディングな見方が流布してしまった、と予測される。実際、類別詞と定性の関連性はただの偶然であることはすでに Daley (1998: 61) によって示されている。Daley (1998: 59) では、類別詞が定の名詞句に付きやすいのは、単純に、定の名詞句の出現度が不定の名詞句の出現度より高いからと指摘されている。Daley (1998: 58) は聞き手に対して、指示対象が持つ情報が旧情報である場合、または重要ではない場合、類別詞を付けなくても構わないと指摘している。

したがって、本稿では、類別詞の使用は新旧情報及び情報のアクセス容易さによって判断できることを主張する。つまり、既知の旧情報に対して、類別詞が現れない方が自然、未知の新情報およびアクセスしにくい情報に対して、類別詞が現れる方が自然ということである。これは Bisang & Quang (2020: 38-42) に提示された不定の文脈に出現する類別詞の例によっても確かめられる。Bisang らによると、類別詞が定の文脈に出現する傾向があるが、不定の文脈に出現する場合は *thetic statements*、*existential expressions*、*verbs and situations of appearance* という 3 つの場合にまとめられる。これらの場合に現れる名詞は全て、新情報、あるいは、アクセスしにくい情報として考えられる。

まず、*thetic statements* について説明を行う。*thetic statements* は常に *categorical statements* とペアになって議論されている。Sasse (1987: 512) によると、*categorical* は 2 つの連続した行為、すなわち「対象を命名すること」と「それについて述べること」から成る。さらに、この 2 つの行為自体がそれぞれ判断であるとみなされるため、*categorical* 判断は二重判断とも呼ばれる。これに対して、*thetic* は単に事象や状態、状

況を表明するものとされる。thetic は「判断の素材を承認または拒否する」という心的行為の表出であるため、単純判断とも呼ばれる。また、Kuroda (1972: 156) では、thetic と categorical は人間の基本的な 2 種類の判断であることを述べている。日本語ではこの 2 つの判断の違いは「は」と「が」によって反映できる。

(31) a. thetic: 犬が走っている。

b. categorical: 犬は走っている。

(Kuroda 1972: 160)

例 (31a) は走るという事象があつて、ある項、つまり、犬が、走るという行動を表現する参与者として扱われている。一方、(31b) は走る行動を表現する犬が言及されている。Kuroda (1972) では theme がある場合、何かについて言及される項目は「は」で標記する。このような文は categorical、そうではない場合は「が」で標記され、thetic と見なされる。さらに、Sasse (1987) では、thetic statements は all-new utterance と重なり、categorical statements は topic-comment 構造、theme-rheme 構造と重なることも示されている。この対応関係と Kuroda (1972: 156) の日本語の例から、thetic statements に現れる名詞は、新情報、categorical statements に現れる名詞は旧情報として考えることができる。実際、Sasse (1987) は英語の例を用いて、thetic statements と categorical statements の違いを分析している。英語において、例 (32) のように、thetic と categorical の区分はイントネーションによって区別できる。

(32) a. thetic statements:

(What's new?) HARry's coming/*HARry's COMing.

b. categorical statements:

(What's going on outside?) HARry's SINGing/*HARry's singing.

(Sasse 1987: 521)

Sasse (1987: 521-522) によると、例 (32a) と例 (32b) の文脈は似ているが、その違いは聞き手がどのように情報を期待し、仮定するかにある。例 (32a) において、Harry's coming という情報は一つの全体として見られる。coming という事象と Harry という個体は等価的な情報価値がある。一方、例 (32b) において、与えられた文脈は、事象に対する情報が必要とされる質問である。質問をする人は、外の雑音に対して質問をし、その雑音の正体は歌だと認識させられる。この事象の源は Harry によるものであるが、Harry は質問者の関心事からは離れている。言い換えると、「歌」と「Harry」

は異なる情報価値を持つ。例 (32a) は Harry's coming そのものに関心が向けられているのに対して、例 (32b) は雑音だけに対して関心が向けられている。

Bisang & Quang (2020: 39) に提示された *thetic statements* の例が (33) である。Sasse (1987) の指摘にしたがうと、例 (33) において、「時計が鳴る」は一つのまとまりとして考えられ、関心が向けられているのは、「時計」でも「鳴る」でもなく、事件の全体であるため、「時計」と「鳴る」は両方とも新情報である。同様に、「男性が顔に水をかけられた」に対しても、全体を一つとして関心を持つため、「男性」と「顔に水をかけられた」は両方とも新情報として考えられる。

- (33) **Chiếc đồng hồ báo thức reo lên lúc 8 giờ đúng.**
 類別詞 時計 アラーム 鳴る に 8 時 ちょうど
Người đàn ông đang ngủ thì bị nước
 類別詞 男 ている 寝る 関係節 被る 水
văng tung toé vào mặt.
 飛び散る に 顔
 「目覚まし時計がちょうど8時に鳴った。寝ている男性は顔に水をかけられた。」
 (Bisang & Quang 2020: 39)

次に、*existential expressions* について説明を行う。*existential expressions* は存在表現であり、*thetic statements* と関わりを持っている。*Thetic* の発話はある事態の存在を断定するものであり (Sasse1987: 556)、また、存在文は *thetic statements* の典型的領域の一つとして捉えられている (Sasse1987: 566)。さらに、Sasse (1987: 570) によると、既出の指示対象を表す要素が現れるものは基本的に *categorical* 構文である。なぜなら、*thetic* 構文の機能はまさに全体として突然・予期せぬ情報を伝えることにあり、既出要素はこの条件を満たさないからである。

存在文は *thetic* 構文であることは他の言語でも観察される。Santiago (2013) では、タガログ語において、存在文は *thetic* 表現であると指摘されている。また、片桐 (2003: 100) によると、不定のものの存在を表す場合、タガログ語では存在文に主題マーカーが用いられないと示されている。これは他の言語で主題が起こらない環境と大きな共通性が見られる (片桐 2003: 111)。つまり、通言語的に、存在文に現れる名詞は主題ではないため、*thetic statements* に現れる名詞と同様に、新情報、あるいはアクセスしにくい情報として考えることができる。

Bisang & Quang (2020: 40) が提示した *existential expressions* の例を、以下に、例 (34) を挙げる。

- (34) Lúc này, có viên cảnh sát vào hỏi xem
 時 この ある 類別詞 警察 に 問う 見る
 tình hình vì hai vợ chồng cãi nhau.
 状況 なぜ 2 妻 夫 争う 互い
 「この時、警察が（一人）入ってきて、なぜ夫婦が争っているのか尋ねた。」
 (Bisang & Quang 2020: 40)

例 (34) の có viên cảnh sát は、直訳すると「警察が一人いる」という意味である。ここで、警察は新しく紹介された新情報であるため、類別詞 viên が必要とされる。

最後に、verbs and situations of appearance について述べる。これは、出現の意味を持つ動詞や状況によるケースであり、これも *thetic statements* に関わっている。Sasse (1987: 566) は存在表現を広義に捉え、その範囲に *presence, appearance* といった表現も含めている。また、Sasse (1987: 528) は、主語強調文が出現・消失を表す動詞や存在表現を表す動詞と頻繁に共起することを指摘し、主語強調文は主題を欠くため、*thetic statements* として扱っている。そのため、出現の意味を持つ動詞や状況は存在表現と同様に、*thetic statements* であるため、現れる名詞は新情報として扱うことができる。以下、例 (35)、(36) は Bisang & Quang (2020: 42) が提示した例である。

- (35) Nhưng sau đó, cái túi áo của ông
 関係詞 後 その 類別詞 ポケット の 類別詞
 chồng bị lung, lò ra cái **tẩu thuốc,**
 夫 被る 破れる 現れる 出る 類別詞 喫煙パイプ
 chứ không phải vật gì có thể gây nguy hiểm.
 関係詞 否定 何か 可能 引き起こす 危険
 “しかし、その後、夫のポケットが破れ、明らかに危険を引き起こす可能性のない喫煙パイプが現れた。”
 (Bisang & Quang 2020: 42)

- (36) Mài mê nhìn gái nên nó vấp phải
 情熱 見る 女の子 関係詞 三人称単数 つまずく 受動
cục đá và té xuống đường.
 類別詞 石 関係詞 転ぶ 下る 道
 “彼は情熱的に女の子を見つめ、そのせいで石につまずいて道で転んだ。”
 (Bisang & Quang 2020: 42)

例 (35) の lò ra は「現れる」という意味になるため、この文は出現の文脈として成立する。Ra は日本語の複合動詞の「-出す」「-出る」に相当する。その後ろに現れる名詞は一般的に初めて導入された物事として捉えられ、すなわち新情報である。したがって、**tẩu thuốc** 「喫煙パイプ」の前には、類別詞が必要とされる。一方、例 (36) につい

ては、出現の意味を持つ形式が実際にはないため、**Bisang** らがなぜそれを出現の意味を持つ文脈として考えているかは疑問に思われる。しかし、この文の意味から見れば、「彼は女の子を見つめ」、その後、何が起こるかは全く分からないため、後半の文は全部新情報として考えられる。そのため、**đá**「石」も新情報として考えられ、その前に類別詞が必要とされる。

以上では、**Bisang & Quang (2020)** の例を用いて本稿の主張を確かめた。主張を繰り返すと、既知のものに対して、情報量が少ないものが用いられるため、省略形式や、裸名詞が許容されやすい。一方、新情報に対して、より多くの構成要素を含む形式が用いられるため、類別詞をつける形式が許容されやすい。従来の観点では、「類別詞＋名詞」は定名詞句を標示する、「類別詞＋名詞」は不定より、定の文脈における出現する頻度が高いと思われるが、実際には、類別詞の使用は他の要因に影響されたからと考えられる。本稿では、類別詞の使用に影響する要因として、文体、ポライトネス、情報量といった三つを挙げたが、すでに様々な先行研究で指摘されたように、他の影響要因も存在するため、詳しい調査は今後の課題とする。

5 結論と今後の課題

5.1 結論

ベトナム語において、裸名詞と「類別詞＋名詞」は定性との関係について、様々な方法で研究されてきた。しかし、類別詞は日常会話の中で使用されにくい傾向があるため、類別詞の使用実態に関しては、従来の先行研究からは判断し難いと考えられる。本稿は自然談話を用い、「類別詞＋名詞」と裸名詞の定性文脈における出現状況を検討し、類別詞の使用と定性との関係を明らかにした。自然談話に基づく調査結果は以下の通り。

- (37) a. 定の文脈と不定の文脈を問わず、裸名詞の方が全体的な出現頻度が高い一方で、「類別詞＋名詞」の出現頻度は相当低い。
- b. 「類別詞＋名詞」は指示的文脈にのみ出現するため、類別詞が指示機能を持つことが実証された。
- c. 「類別詞＋名詞」は指示的定の文脈における出現率がより高いが、裸名詞は三つの定性文脈における出現傾向に大きな差はない。
- d. 指示的定を表す手段としては、「類別詞＋名詞」よりも、裸名詞の方が用いられやすい。

また、類別詞の使用が丁寧さに関わるかどうかを検証するため、本稿では、アンケート調査も実施した。その結果は以下の通り。

- (38) a. 丁寧さが必要ではない場面に、類別詞が使用されにくくなる現象が確認されたため、類別詞の使用と丁寧さに関わりがある。
- b. 友人間では、裸名詞が「類別詞＋名詞」よりも自然である場合と、裸名詞と「類別詞＋名詞」の自然さに差がない場合の2パターンが存在するが、「類別詞＋名詞」が裸名詞よりも自然である場合は存在しない。
- c. 先生と会話する場合、つまり、丁寧さが必要な場面で、裸名詞と「類別詞＋名詞」の自然さに大きな差はない。
- d. 先生と会話する場合、「類別詞＋名詞＋指示詞」がより自然な場合が観察されたが、この形式は友達同士の会話では観察されない。

本稿では、これらの結果を説明するため、Rijkhoff (2002: 37-42) が提示した文体、丁寧さ、情報量といった三つの要素を中心に議論を行なった。文体との関係は以下のようにまとめられる。先行研究の書き言葉コーパスおよび独話の話し言葉コーパスでは、類別詞の使用頻度が裸名詞よりも高いが、本稿で扱った自然談話のデータでは、裸名詞の使用頻度が「類別詞＋名詞」よりも高いという、正反対の結果が得られている。その違いは、Koch & Oesterreicher (2012: 450) が指摘しているように、文体の違いによる影響が大きい。

次に、丁寧さに関して、カジュアルな会話では、裸名詞がより自然だが、丁寧な会話では、より複雑な形式である「類別詞＋名詞＋指示詞」が自然という結果が得られた。これは Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論によって説明できる。つまり、カジュアルな場合、聞き手に好かれないというポジティブフェイスに配慮するため、より簡潔な形式が用いられる。一方、丁寧な会話の場合、聞き手に干渉されたくないというネガティブフェイスに配慮するため、より明確で複雑な形式が用いられる。

さらに、指示的定を表す手段として、裸名詞が用いられやすいという結果については、Grice (1975) の「量の格率」と Givón (1988) のコードと情報量の原則によって説明できる。つまり、コミュニケーションをスムーズに行うためには、ちょうど良い情報量で発話することが求められ、アクセスしやすい指示対象は最も短い形式で符号化されるが、アクセスしにくい指示対象は最も長い形式で符号化されるということが示されている。この原則によれば、すでに談話内で確立された指示対象に対しては、ゼロ照応や、代名詞、裸名詞がより用いられやすいが、アクセスしにくい指示対象は、情報量が多く含まれる「類別詞＋名詞」や「類別詞＋名詞＋指示詞」が用いられやす

いというように説明が成り立つ。

そして、本稿では、以上の議論を踏まえ、以下のことを主張する。これまでは、「類別詞＋名詞」は定名詞句を標示する、あるいは、類別詞が定の文脈に多く現れると考えられてきたが、それは、類別詞の使用が、実は、定性ではなく、他の要因によって要求されるものだからに過ぎない。本稿は、類別詞の使用が定性と直接に対応するのではなく、情報の新旧やアクセスのしやすさといった要因に基づいていると主張する。つまり、新情報に対して類別詞が現れやすく、既知の情報に対して、より簡潔な形式が用いられるため、類別詞が現れにくいということである。それは Givón (1988) の指摘に合致し、また、すでに 4.4 節で例を用いて確かめられた。さらに、本稿のこの主張は、形式と意味・機能の対応関係を「類像性」の観点から捉える Haiman (1985) の主張にも一致している。つまり、重要で強調される内容や、聞き手にとって新しい内容は、文中で長く、詳細に記述されやすいという傾向が通言語的に存在しており、ベトナム語における類別詞の使用もまた、この通言語的傾向の一つの現れとして位置づけることができる。

5.2 今後の課題

Cheng & Sybesma (1999) は、「類別詞＋名詞」と裸名詞という二つの形式は相補分布を示すと予想している。つまり、ある言語において、明確な指示対象を指すために「類別詞＋名詞」が使用できる場合、対応する裸の名詞形はそのような用途には使用できないはずであると予想される。しかし、Simpson et al. (2011) では、ベトナム語において、これら 2 つの形式の分布は必ずしも相補分布ではないことが示されている。

「類別詞＋名詞」を使用するか裸名詞を使用するかは、指示問題にも関わる。指示手段は他に代名詞や省略、指示詞などが存在する。実際、筆者のエリシテーションとアンケート調査では、「類別詞＋名詞」と裸名詞のいずれも不自然になるような場合も、相当数確認されている。日常会話では、ある対象を指示する場合、名詞を用いる以外にも、指示詞や省略といった手段がかなり多く用いられる。そのため、「類別詞＋名詞」と裸名詞の 2 つだけをパラディグマティックな関係として立てることは不十分である。今後は、パラディグマティックな関係を成すすべての指示手段を調査する予定である。

また、本稿では、先行研究の流れにしたがい、「類別詞＋名詞」と裸名詞の定性文脈における出現状況を検討し、類別詞の使用と定性との関係を明らかにするとともに、その使用に影響を及ぼす要因の解明を試みた。実際には、影響要因はすでに先行研究で複数提示されており、具体的には、指示性、個別化、焦点、語順、談話助詞などが挙げられる。これらの要因は個別に作用するのではなく、常に相互に融合しながら機能し、しかもいずれも定性に深く関わっている。このことが、類別詞現象を取り扱う

際に大きな戸惑いを生じさせる原因となっている。今後は、こうした諸要因を統合的に考慮し、類別詞使用に影響する複合的なメカニズムを提案することを目指す。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2000) *Classifier: A typology of noun categorization devices*. New York: Oxford University Press.
- Bisang, Walter (1999) Classifiers in East and Southeast Asian language: Counting and beyond. In: Jadranka Gvozdanović (ed.) *Numeral types and changes worldwide*, 11–186. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Bisang, Walter & Kim Ngoc Quang (2020) (In)Definiteness and Vietnamese classifiers. In: Kata Balogh, Anja Latrouite & Robert D. Van Valin, Jr. (eds.) *Nominal anchoring: Specificity, definiteness and article systems across languages*, 15–49. Berlin: Language Science Press.
- Brown, Penelope & Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cao, Xuan Hao (1988) The count/mass distinction in Vietnamese nouns and the concept of ‘classifier’. *Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung* 41 (1) : 38–47.
- Cheng, Lisa L-S. & Rint Sybesma (1999) Bare and not-so-bare nouns and the structure of NP. *Linguistic Inquiry* 30: 509–542.
- Comrie, Bernard (1989) *Language universals and linguistic typology*, Second edition. Chicago: University of Chicago Press.
- Daley, Karen Ann (1998) *Vietnamese classifiers in narrative texts*. Texas: Summer Institute of Linguistics and The University of Texas at Arlington.
- Dixon, R.M.W. (2012) *Basic linguistic theory. Vol.3. Further grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Givón, Talmy (1984) *Syntax: A functional-typological introduction*. Volume I. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Givón, Talmy (1988) The pragmatics of word order: predictability, importance and attention. In: Michael Hammond, Edith A. Moravcsik & Jessica Wirth (eds.) *Studies in syntactic typology*, 243–284. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Grice, H. Paul (1975) Logic and conversation. In: Peter Cole & Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech acts*, 41–58. New York: Academic Press.

- Haiman, John (1985) *Natural syntax: Iconicity and erosion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koch, Peter & Wulf Oesterreicher (2012) Language of immediacy – language of distance: Orality and literacy from the perspective of language theory and linguistic history. In: Claudia Lange, Beatrix Weber & Göran Wolf (eds.) *Communicative spaces: Variation, contact, and change. Papers in honour of Ursula Schaefer*, 441–473. Frankfurt: Peter Lang.
- Kuroda, S.-Y. (1972) The categorical and the thetic judgment: Evidence from Japanese syntax. *Foundations of Language* 9 (2) : 153–185.
- Linell, Per. (2004) *The written language bias in linguistics: Its nature, origins and transformations*. London: Routledge.
- Löbel, Elisabeth (2000) Classifiers versus genders and noun classes: A case study in Vietnamese. In: Werner Winter (ed.) *Gender in grammar and cognition*, 259–319. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Meletis, Dimitrios & Christa Dürscheid (2022) *Writing systems and their use: An overview of grapholinguistics*. Berlin/ Boston: De Gruyter.
- Nguyễn, Tài Căn (1975) *Ngữ pháp tiếng Việt* [ベトナム語文法] Hanoi: Vietnam National University.
- Nguyen, Tuong Hung (2004) The structure of the Vietnamese noun phrase. Doctoral dissertation, Boston University.
- Olson, David R. & Angela Hildyard (1983) Literacy and the comprehension and expression of literal meaning. In: Florian Coulmas & Konrad Ehlich (eds.) *Writing in focus*, 291–326. Berlin/New York/Amsterdam: Walter de Gruyter.
- Perkins, Revere D. (1992) *Deixis, grammar, and culture*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Phan, Trang & Dong Lam Quang (2021) Decomposing definiteness in Vietnamese. *Journal of Southeast Asian Linguistics Society* 14 (1) : 1–18. University of Hawai‘i Press.
- Phan, Trang, Tue Trinh & Hung Phan (2022) Deriving four generalizations about nominals in three classifier languages. *Canadian Journal of Linguistics/Revue canadienne de linguistique* 66 (4) : 470–485.
- Rijkhoff, Jan (2002) *The noun phrase*. New York: Oxford University Press.
- Santiago, Paul Julian (2013) Topicless constructions as thetic statements in Tagalog. *Handbook of the 147th meeting of the Linguistics Society of Japan*: 206–211.
- Sasse, Hans-Jürgen (1987) The thetic/categorical distinction revisited. *Linguistics* 25 (3) : 511–580.

- Simpson, Andrew, Hooi Ling Soh & Hiroki Nomoto (2011) Bare classifiers and definiteness: A cross-linguistic investigation. *Studies in Language* 35 (1) : 168–193.
- Tran, Jennie (2011) The acquisition of Vietnamese classifiers. Doctoral dissertation, University of Hawai‘i at Manoa.
- Trinh, Tue (2011) Nominal Reference in two classifier languages. *Proceedings of Sinn Und Bedeutung* 15: 629–644.
- 今井邦彦・岡田聡宏・井門亮・松崎由貴 (2021) 『語用論のすべて：生成文法・認知言語学との関連も含めて』東京：開拓社.
- 片桐真澄 (2003) 「フィリピン諸語における主題—タガログ語の *ang* 句の主題性を中心に一」 益岡隆志 (編) 『主題の対照』 89–113. 東京：くろしお出版.
- 三上直光 (1986) 「ベトナム語における類別詞の機能について」 『慶応義塾大学言語文化研究所』 18: 179–193.
- 三上直光 (2005) 「ベトナム語類別詞再考」 『慶應義塾大学言語文化研究所』 37: 183–200.

付録 1

データ1. 裸名詞および、「類別詞+名詞」のREF-DEF、REF-INDEF、NON-REF文脈における出現状況									
データ1. 雑談	該当名詞の出現頻度	裸名詞としての出現頻度	REF-DEF文脈における裸名詞の出現頻度	REF-INDEF文脈における裸名詞の出現頻度	NON-REF文脈における裸名詞の出現頻度	「類別詞+名詞」としての出現頻度	REF-DEF文脈における「類別詞+名詞」の出現頻度	REF-INDEF文脈における「類別詞+名詞」の出現頻度	NON-REF文脈における「類別詞+名詞」の出現頻度
ký túc xá (寮)	12	11	7	2	2	0	0	0	0
phòng (部屋)	17	14	8	5	1	0	0	0	0
TV (テレビ)	3	3	0	2	1	0	0	0	0
sách truyện (漫画)	2	2	0	1	1	0	0	0	0
bếp (キッチン)	13	13	7	4	2	0	0	0	0
giường (ベッド)	4	2	0	2	0	0	0	0	0
tủ (クローゼット)	10	6	1	5	0	0	0	0	0
ban công (バルコニー)	3	1	1	0	0	0	0	0	0
đồ (服)	2	2	0	0	2	0	0	0	0
máy giặt (洗濯機)	3	2	1	1	0	0	0	0	0
bàn (机)	2	0	0	0	0	0	0	0	0
rác (ゴミ)	3	3	0	0	3	0	0	0	0
nước (水)	13	6	0	2	4	0	0	0	0
đồng hồ (時計)	2	0	0	0	0	2	2	0	0
giá (値段)	5	5	0	0	5	0	0	0	0
máy hút bụi (掃除機)	2	2	0	0	2	0	0	0	0
xe đạp (自転車)	11	10	3	0	7	0	0	0	0
học bổng (奨学金)	3	3	0	0	3	0	0	0	0
kinh nghiệm (経験)	2	2	0	1	1	0	0	0	0
trường (学校)	4	4	0	3	1	0	0	0	0
合計	116	91	28	28	35	2	2	0	0

付録 2

データ2. 裸名詞および、「類別詞+名詞」のREF-DEF、REF-INDEF、NON-REF文脈における出現状況									
データ2. ゲーム	該当名詞の出現頻度	裸名詞としての出現頻度	REF-DEF文脈における裸名詞の出現頻度	REF-INDEF文脈における裸名詞の出現頻度	NON-REF文脈における裸名詞の出現頻度	「類別詞+名詞」としての出現頻度	REF-DEF文脈における「類別詞+名詞」の出現頻度	REF-INDEF文脈における「類別詞+名詞」の出現頻度	NON-REF文脈における「類別詞+名詞」の出現頻度
giấy (紙)	2	2	0	0	2	0	0	0	0
nhà (家)	3	1	0	0	1	0	0	0	0
video (ビデオ)	2	2	0	0	2	0	0	0	0
góc (độ) (角度)	3	3	0	0	3	0	0	0	0
mẫu (サンプル)	3	3	2	1	0	0	0	0	0
xếp hình (パズル)	3	3	0	0	3	0	0	0	0
quán trà/trà quán (茶館)	5	5	0	0	5	0	0	0	0
gấu trúc (パンダ)	22	3	0	1	2	17	14	3	0
tay (手)	3	3	2	0	1	0	0	0	0
quầy (カウンター)	4	4	0	0	4	0	0	0	0
giá (棚)	9	4	4	0	0	2	1	1	0
dây (leo) (つた)	12	6	1	1	4	2	2	0	0
gỗ (木材)	3	1	0	0	1	2	2	0	0
âm (ケトル)	5	0	0	0	0	5	4	1	0
cửa sổ (窓)	2	1	0	0	1	1	1	0	0
bàn (机)	8	2	1	0	1	4	4	0	0
cầu (橋)	2	0	0	0	0	2	1	1	0
tờ (シート)	4	3	3	0	0	0	0	0	0
chi tiết (詳細な部分)	4	2	1	0	1	0	0	0	0
éch (カエル)	3	0	0	0	0	3	2	1	0
lá (sen) (蓮の葉)	6	1	0	1	0	4	3	1	0
đĩa (皿)	5	2	2	0	0	1	1	0	0
合計	112	51	16	4	31	43	35	8	0

Classifier Use and Noun Phrase Definiteness in Vietnamese: A Study Based on Natural Discourse

Abstract

This paper investigates the distribution of classifier-noun phrases and bare nouns in Vietnamese natural discourse, with special attention to the relation between these distribution and definiteness and the factors influencing their use. The results show that (a) in contexts of referential definiteness, bare nouns are strongly preferred over classifier-noun phrases; and (b) in polite situations, classifier-noun-demonstrative combinations are favored, whereas in casual contexts, bare nouns are more natural. These findings are interpreted in terms of three factors: style, politeness, and amount of information. While previous studies have suggested that classifiers frequently appear in definite noun phrases, these results indicate that their use is primarily determined by the newness and accessibility of information. Classifiers tend to appear when introducing new information, providing clarity, whereas bare nouns, zero anaphora, and pronouns are more commonly used for already accessible or familiar information.

Keywords: Vietnamese, classifier, definiteness, information, politeness

受領日 2025 年 9 月 30 日
受理日 2025 年 12 月 25 日